

SaGa Frontier2 レーテ侯伝

水城悠理

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物心付いたときには兄が後の鋼の13世となる人物であると気が付いた。

世界を救う気は毛頭ないが、枕を高くして寝るために何から手を付ければいいのか……

とりあえず亡命してから考えようか

旧スクウェア（現スクエニから発売されたSaga Frontier 2の二次創作です。

主人公の能力は相性負け以外では最強ですが、基本的に内政・ツール制作を主軸に置いています。

本作はサガフロンティア2原作ならびにアルティマニア、サンダイル年代記をベースに設定を作っておりますが矛盾が発生した場合こつちで正しいと思った記述を引用します。

※ロマサガRSの設定は拾えそうでしたら拾えます。

本作はArcadiaに掲載していたものを一部修正した上で投稿しています。

毎週土曜または日曜に投稿予定

目次

1 2 2 6 年 アニマ至上主義に対する一見解	1
1 2 2 7 年 王子の出奔	5
1 2 3 2 年 ジャン 1 2 歳	11
閑話 1 アニマにまつわる師と弟子の会話	16
1 2 3 3 年 少年統治者	20

1226年 アニマ至上主義に対する一見解

サンダイル暦1220年

フィンニー王ギユスターヴ12世とノール侯ソフイーとの間に二人の息子が生まれる。

オート侯との決戦に勝利と共に生まれた子達はこれからのメルシユマン統一に於ける兆しであろうと認識した。

「先に生まれたのは」

「この子ですわ陛下」

産後間もない双子の左の子を指さす母ソフイーは、若干疲れていたが意識もはつきりしている。

「よし、兄は父祖を継ぐギユスターヴ、弟はジャンと名付けよう」

時代の革命児たる二人の父親として歴史に名を残すギユスターヴ12世は、史書に於いて権謀の人だと言われる。だが、この時はこの瞬間だけは自分の跡を継いでくれる息子の誕生を喜んでいた。

サンダイル暦1226年

『鋼のギユスターヴ』の双子の弟というのは遺伝子的にはどうなのだろうかというのが生まれ落ちた時のジャンの感想だった。死ぬまでの記憶を持ったまま異世界に生まれ落ちるといえるのは中々体験できないものでは無いのだが、時折テレビ番組などで前世の記憶を持っているという人が出ているのだから皆無ではないのだろうと結論づけた。

自分がかつて日本という島国で生まれ育った人間である。術やらモンスターのいる世界とは無縁であったことを思いだすと同時に、ギユスターヴという人名とファイアブランドという言葉は、四半世紀前にやってきた懐かしいゲームの世界であることに気付いたのだ。

有り体にいってしまえば地球という星で国内の平均寿命と比較するとやや短いながらも人生を大過なく終えた自分は、サンダイルなる世界に飛ばされたということになる。もつとも、譫妄状態の自分が見ている夢であることも否定できないが。

「しかし、ギユスターヴの弟とはな」

術不能者から当代を代表する人物と成った鋼のギユスターヴ。その最期はどこか織田信長に似ているのだが、とりあえず今の関心事と言えば自分に術の適正があるか否かである。

鏡に映る兄に似た容姿を訝しむジャンは現在6歳。術という現象の発露を扱ったことはないものの、意識すれば自分の体にアニマが巡っているのも「視える」。そう視えるのである。

「どうしたんだジャン、シルマール先生がいらっしやるぞ」

勢いよく部屋に兄であるギユスターヴが入ってきた。自分が病弱とは思っていないが、兄ほど体を動かす才能が無いことも理解している。

（術不能者の方が肉体的に強い？ それともギユスターヴだけの遺伝的特質か。これは調査した方がいいか）

「もうそんな時間か。分かった」

嬉しそうにシルマール師の元へ向かうギユスターヴを視る。白い靄のようなものが世界に満ちあふれており、これが大気に溢れるアニマであるとジャンは認識している。普通の人はアニマを吸って、呼気と共に吸った量より少ないながらも靄を吐き出している。しかしギユスターヴはアニマを吸っているが靄が出ることはない。

人間もそうだが、生き物は酸素を吸って二酸化炭素を出すように大気中のアニマを吸い排出する。しかしギユスターヴはアニマを吸い込んでも出すことはない。これは生物的には歪である。

自分たちの師として招かれているシルマールはアニマを大量に吸い込んで排出する量は少ない。これはアニマコントロールが優れている証拠なのだろう。しかし、ギユスターヴはアニマを全然出さない。しかし「目」を凝らせばギユスターヴの中には生まれて時から蓄え続けられ濃縮されているアニマが存在していることが分かる。

当代最高の術士であるシルマールは、それを強いアニマと評した。それは黒い箱の中に入っているダイヤモンドを見つけるようなものであり、通常の人間ができるわけがない。もはや超感覚と言ってもいいだろう。

「絶縁体みたいなものか」

「絶縁体？」

目の前にいる30代の男性こそ兄弟の教師であり、当代随一の術士と謳われるシルマール先生だ。穏和そうではあるが、中身は結構熱い人物であることをジャンは識っている。

「すみませんシルマール先生、別のことを考えてました」

「ギユスターヴ君は真剣に勉強しますけどジャン君は……」

「申し訳ありません」

自分が術を使えることは理解していたので、今の関心は術で何ができるのかということだ。そういつた点でシルマールの術に対する視野の広さは勉強になっていた。

「ギユスターヴ君は先に戻って結構です、ジャン君は少しお話ししましょうか」

「きつちり絞られるよジャン。シルマール先生失礼します」

ギユスターヴが出ていくとシルマールはため息をついた。

「かつて我が師であるルナストル先生が私を見つけた時の話を冗談だと思っていました、その時の気持ちが良い分かります。ジャン君のアニメは同じ頃の私よりも多い」

確かクヴェルと勘違いしたただったかな。確かにあれだけ濃厚なアニメを蓄える先生はクヴェルに匹敵するだろう。

「アニメの濃さならギユスターヴの方が上ですよ。ただ」

「ただ？」

「俺も先生も含めた普通の人間はアニメを術という形で発現できますが、もしアニメがあっても術が使えないのなら何が原因だと思いますか？」

「難しい質問ですね。術不能者が術を使えないのはアニメを蓄える能力に欠けているからという見解が一般的です」

「では、術者と一般人、術不能者を比較した場合の健康的な傾向は。アニメが生命の源であるならば術士は統計的に長生きの可能性は高いと思いますが、一般人と術不能者は大して違わない。その辺はどうなんでしょう」

「その視点はいいと思います。アニメを生命の力と仮定するならば術

不能者は若くして命を失うことになるでしょう。しかし現実的に術不能者の寿命が短いのは生活環境にあると思います。これは社会的な問題であって、生物的な問題ではありません」

「先生、俺はアニメを扱う才能があると思います。ですがそれは力を誇示するためでもなく、社会の問題や軋轢を少しでも少なくするために使うべきではないでしょうか。計算するのにアニメは不要ですし、芸術にアニメは不要です」

差別を無くすことはできないが、相対的に差別を少なくすることはできる。それが貴種に生まれてしまった自分の成すべきことだとジャンは思っている。兄は鉄を使い、自分は術を使って世界を変えよう。だが、これからの運命は知らないシルマールは嬉しいような悲しいような表情でジャンを見据えた。

「ジャン君、君の考えは尊いと思います。ですが、メルシユマンという土地は良く言えば伝統的、悪くいえば頭が固い人たちの集まりです。将来君はノール侯になる身。おそらく配下達が付いてこないでしょう」

「では、もし俺がフィニーを離れたのなら先生は協力してくれますか」「それは私の弟子になりたいということでしょうか？　そんなことはあるはずもないですが、その時は君を私の弟子することにしましょう」

この時、シルマールは想像もしなかっただろう。フィニー王家の後継者であるギユスターヴがファイアブランドの継承に失敗して追放され、ジャンも出奔して共にグリユーゲルに連れて行く運命を。

1227年 王子の出奔

サンダイル歴1227年

写真など無い時代、貴族や商人など裕福な家では記念として絵を残すことが習わしだった。ここサンダイルでもそれに変わりはない。

今日は先月生まれたマリーの出産を記念して、フィニー王家は朝から休みを取りながら家族6人でモデルになっていた。

「記念とはいえ、これだけの人数を描かなければならないとは画家の人も大変だ」

ギユスターヴ12世にとって4番目にして初の女子であるマリーの誕生は、公人としても私人としても大いに彼を喜ばせた。

長男であるギユスターヴがフィニー王家、次男であるジャンが妻の実家であるノール侯家を継ぐのがほぼ確定しているが、三男のフィリップは国内に領地を与えるか、どこかに養子、または婿養子として送り込まなければならぬ。

その点娘であるマリーは条件の良いところに嫁がせればいいという気分的には些か楽な立場だった。将来は、母親であるソフィーに似ればさぞ美人になるだろうと期待でき、父親としても鼻が高い。

「ところで、ジャン。お前はまた城を抜け出したそうだが、場内の警備に問題があるということか」

次男のジャンは、ギユスターヴ12世にとって悩みの種であった。品行方正な兄ギユスターヴに比べて、その弟はとにかく落ち着きがない。本の虫であり、芸術に関心があるので内向きかといえそうではなく、度々城を出て、周囲のものの顔を青くしている。

「秘密です。それに危険な場所だと思ったらきちんとジョルジュに同伴してもらいます」

ジャンの側付きであるジョルジュは、将来のノール侯であるジャンのためにノールから派遣されてきた騎士の一人で、彼の父はノールの重鎮であるサンド伯である。側付きの中では17と一番若い、腕は確かなのでジャンが外出する際は同伴することが多い。

「そうか・・・お前が街を見て平民の暮らしがどのようなかを知ることがあることはいいことだと私は思う。ジヨルジュには苦勞をかけるがな」

「確かに色々と困る方ではございますが、仕え甲斐のある方ですので」
フィニー王であるギユスターヴ12世とノール侯ソフィーの婚姻によつて、息子であるギユスターヴ13世を両方の統治者にする事も考えたが、双子であつた為にギユスターヴにフィニー王家を継がせるべく譜代の家臣を、ジャンにはノール侯国から来た家臣を付けていた。

ノールの家臣団は、同君連合となつた形式的には妻であるソフィーの配下である。譜代の家臣と外様の家臣をフィニーをと一つ一つの枠に入れるのは息子たちの世代の課題になるだろう。

できれば自分が生きている間にオートを降し、その圧力を持つてシュツドを降したいものだが息子が初陣を飾る頃までは内政に務めるべきだろうと考えていた。

「ジャン君、君が才能があるのは分かりますがあまり悪用して欲しくないのですが」

「ちよつとしたイタズラです。アニマをコントロールをしてちよつと認識をずらす程度のかわいいものじゃないですか」

サンダイルの人間は他者を見ると、目で視認しているとともに、アニマで相手を確認している。ここでいうアニマは気配みたいなものだが、サンダイルの人間はアニマをもつて他者を識別することが常識であり、術不能者でもアニマは持っている。人は術不能者を認識できるが、逆に術不能者は一般人を目視でしか認識をすることができない。これは日常生活はともかく、戦場などでは致命的であり、盾ぐらいにしか使えないといわれる所だった。

では、ジャンがどうやって王城から抜け出しているかというところ、アニマを周囲に溶け込ませて認識しないレベルまで気薄にしているのである。ジャンの知識にあるサソリの技術の真似事だが、相性が良かったのかサソリもどき程度には使えるようになっていた。もちろん

ん分かる人間には分かるもので、教師であるシルマールには認識されていたし、かくれんぼをしても兄であるギユスターヴには簡単に見つかってしまおう。

「それで、ジャン君は何をしてるんですか？」

「今お店ではどんなものを扱っているのかとか、各地からの特産品の値段とかですね。そういうえばツールって大抵がナ国からの輸入なんですけど、どうして自国で大々的に開発しないのでしょうか？」

「確かに制作に簡単なものは自国で開発していると思いますが、機構が複雑なものは技術先進国であるナが圧倒的だからです。実物から解析しようとしても難しいですからね。ツール職人が徒弟制であることも大きいでしょう。ラウツホルプや夜の街では独自のツール制作技術も高いことは高いですが、生産量や地理的条件などで大量には捌けません。国土の4割が荒野や砂漠であるナ国にとって、ツールは国家事業でもあるのです」

「なるほど、ではフィニーからは麦などを輸出しているのですね」

「干物なども人気ですね。国土が広いので生魚を食べられる地域はそれほど多くありませんから」

「術で凍らせて運んだらどうですか？」

「南大陸は熱いところは本当に熱いので、それ専用のツールでも考えない限りコスト的に無理ですね。加えて街道の整備なども考えなければならぬでしょう」

ここで交わされた話は当時のシルマールにとっては雑談程度の話だったが、ジャンにとっては金にも等しい情報だった。

兄は鉄という技術で根を張るなら自分はツールという技術で根を張る。ジャンと兄の直接的な関わりは7年しかないが、おそらく自分が同じ場所にいれば疎まれるだろう。

正直、シルマールの弟子という立場ならどこでも生きられるが、ギユスターヴと対立、あるいは彼の覇業に巻き込まれれば破滅しかない。ギユスターヴは王ではあるが政治家としては今一であり、義弟予定のケルヴィンは平時なら名君でいられるが、彼が本格的に政治の表舞台に立つのは非常時であり、生まれ持つての政治家であるカンター

ルに勝てるわけがない。おそらくフィリップは政治家になれると思うが、救えるのかどうか。

このように考えれば自分は十国で力を蓄えて北方開発に向かうのがベストだろう。

「来月はファイアブランドの儀式大丈夫でしょうか」

「ギユスターヴ君ほどのアニマの持ち主なら大丈夫でしょう」

シルマールはギユスターヴが内包するアニマの巨大さを超感覚で認識していた。ジャンもそれを認めていたが、それは絶対に空けられない箱に入っているものだと言念していた。

前者は儀式が失敗するなど思っていなかったが、後者は失敗することを前提に今後に想いを馳せるのだった。

ファイアブランド継承の失敗はその場にいた者を通じて翌日にはテルム全域に広がっていた。ギユスターヴと生母であるソフィーが王城から去ったのはそれから3日後のことである。まだ5歳のフィリップは突然の出来事に混乱していたが、ギユスターヴの双子の弟であるジャンは平静を保っていた。もともと、ここ一ヶ月間は「外出」を控えていたが。

「お呼びでしょうか父上」

父であるギユスターヴ12世、そして先日継承に失敗したギユスターヴの弟であるジャンの2人だけが、虚空に浮かぶファイアブランドを納めた継承の間にいる。いつもは疲れなどを顔に見せない父王が、心労か心なし顔色が良くないとジャンは思った。

「私が言いたいことは分かるな」

「嫌です。剣は2年後にフィリップに継がせてください。私が成功すれば母上は戻ってこられますが、ギユスはどうするのです」

「命令だ」

「剣が拒絶しますよ。クヴェルに意志があるのか知りませんが破壊されたくないでしょう」

ジャンは笑いながら、ダムで調整していた水量を一気に解放するように、自分の中に抑えていたアニマを絞り出す。術法も使っていない

にも関わらず空気が振動した。過剰なアニマに反応したのかファイアブランドが赤く輝き炎を吹き出す。それは容量以上に水を注がれた皮袋が破裂する光景に似ていた。

「止めよー」

父親の声を聞くと同時にアニマの奔流は収まり、ファイアブランドは通常の状態に戻っていく。やがて継承の間は静けさを取り戻した。

「ジャン・・・お前は」

「私も母上とギユスターヴに付いていくとしましょう。そうですね母恋しさに出奔したとでもしてください。フィリップがフィニー王になるのなら、私はノール侯として戻りましょう」

ギユスターヴ12世が脳裏に浮かんだのは、ノールに支配されるメルシユマンという自分が望んでいない構図だった。

「：ギユスターヴに済まない」と

「分かりました」

ジャンは継承の間を後にすると、その場にはフィニー王の象徴であるクヴェルとその主だけが残された。ギユスターヴ12世は歴史に取り残される自分を幻視し、それを否定するように首を振った。

「フィリップ」

今日も大好きな母と兄は帰ってこない。何かあったのだろうと心配する日々のフィリップの部屋をもう一人の兄であるジャンが訪れたのは夕暮れ時だった。

「ジャン兄様」

「いいかフィリップ、俺とギユス、母上はちよつと遠くの国に行かなければならなくなった。兄としてマリーのことを守ってやれよ」

「どうしてですか？ ぼくも連れて行ってください」

「ダメだ。お前は跡取りとして立派に勉強しなさい。そうすればいつか母上やギユスと会えるから」

「本当に？」

「フィリップ、俺ができないことを言ったことがあったか？」

フィリップにとってギユスターヴは絵に描いたような立派な兄で

あるが、ジャンはどこか掴みようなない人だった。それでも街に遊びに行ってきた帰りにはおみやげをくれるし、何でも知っている子どもながらに自慢できる兄だった。だからジャンの言うことは信じられる。しかし彼と兄が再会するまで10年を費やすことをこの時のフィリップは予想もしなかった。

この約束はフィリップの人格形成に影響を与えると共に、ジャンにしてみれば生きている内に弟達と母を会わせなければならぬ——歴史の流れを変えるきっかけでもあった。フィリップの部屋を出て自分の部屋に向かうと扉の前にジョルジュが正装で立っていた。3年くらいの主従であつてもお互いに言いたいことぐらいはわかる。

「ジョルジュ、色々迷惑をかけて済まなかつた。これからはフィリップを支えてくれ」

「畏まりました。我が君」

「俺は忠誠に値しないと思うよ」

「ですが、約束は守る方ですから。できるのであれば剣を交わすことがないように祈っております」

そしてジャンは用意していた鞆を部屋から持ち出し、部屋を後にした。騎士は全てを捨ててでも幼き主に仕えたいという願望を抑え、主が見えなくなつてもなおその場から動かず、頭を垂れ続けた。

彼こそ主命に従つて騎士としてノール侯フィリップ1世ならびにフィニー王フィリップ2世を仕え、メルシュマン史における歴史的等級資料として知られるノール年代記を残すサンド伯ジョルジュである。

1232年 ジャン12歳

サンダイル歴1232年

「モンスター化した個体のことは分かりませんが、一般的な植物が花を咲かせるのは日光と水でエネルギーを作り出し出しているからです。鳥が空を飛ぶという行為は上がるまではかなりのエネルギーを使いますが、後は位置エネルギーの問題です。エネルギーという点ではアニマを使っていますが、本能的に術を使っている可能性は否定できません。それとこのモンスターという外敵が多い世界で、個体的な強さはともかく、最大の勢力圏を人間が作り上げた理由は、術の力もそうですが、組織化できたことが大きいと思います。多数でぶん殴るのが一番負担が少ないですからね。少数派を排斥する要因でもあります」

術不能者の兄の行動と、それを諫める母の言葉に対しての弟の反応は、同情でも優越感でも無い。それは学術的な分析だった。

「ジャン君はギユスターヴ君が嫌いなのですか？」

「俺はギユスを無能だと思ったことはありません。あいつが台頭したとき、今あいつをバカにしていた連中は後悔するでしょう。特に手のひらを返したように見捨てた家臣達のことを忘れませんよあいつは」

それは予言というより確信だった。保身の意味もあったのだろうが術が使えないと分かった途端、ギユスターヴに付けられていた家臣達の態度は冷たかった。この仕打ちを7歳のギユスターヴは忘れなかった。

事実バケットヒルの戦いで鋼鉄兵団との戦いの矢面に立たされたのはかつてギユスターヴに付けられていた家臣の家であり、代替わりして当主になっていた家臣達は殺され、その家族は領地を没収され追放されるといふ悲惨な目にあっている。

余談だが、ギユスターヴ13世に精神的な圧迫を与え続けた男は、鋼鉄兵に対して以下のような戦術を考案していた。

「術不能者と鋼鉄の武具の組み合わせは術に対して驚異的な耐性を持

つが、呼吸器官が強いわけではない。またその性質上、移動速度が遅い上、こちらの射程は1.5倍ほどある。鋼のギユスターヴは強靱であり、直属の鋼鉄兵団は攻勢においては世界最強かもしれないが、地形的な条件で嵌める手段はいくらでもある。酸欠と脱水症状を起こさせるのが一番楽かな」

それを聞いたワイド時代から参加している古参の将軍は、一瞬自分の手を汚してでも主君の障害を排除すべきか迷ったが、おそらく死ぬのは自分であり、それを口実に戦いをするという未来を思い浮かべて実行に移せなかった。将軍と同じ席でその話を聞いていた師は、弟子の術法の恐ろしさを考えれば、兵を使って戦争をするという行為そのものが枷をつけるようなものであり、本来は一人で戦った方がコスト的にも人的被害を考えた上でも無駄がない。だが、敢えて普通の手段を取っていることを知っていた。

さて、現在のジャンの立場だが、正式にシルマールの弟子になると共に、同年代の貴族の子女と同様に様々なことを学んでいた。ことに宮廷儀礼や法律に関する知識は同年代の誰よりも優れている。ジャンは自分が変わり者であることを理解しているが、同時に容姿と生活態度さえきちんとしていれば積極的に排除されないことを経験から知っていた。

それでも、母や兄のことを侮辱されようものならやり込める程度のことではなかったので、積極的に友誼を結ぼうとする人間はいなかった。ギユスターヴのように腫れ物のように扱われることもなかった。そして異国の地でも以前と変わらず自分のスペースを確保できる弟の存在は、ギユスターヴにとって自分の心に突き刺さるとげのように思えた。頼んでもいないのに付いてきた弟、術不能者である自分に対する悪意に敢然と立ち向かう弟、大人達と混ざつても対等に話せる弟。そして、すでに術士としての己を確立しつつあるジャンへの向けようもない苛立ちを自分より弱い存在に向ける。彼の心の内の悩みが解決するのは、彼が月夜の夜に出会った幽鬼の剣に魅入られるもう少し未来の話だ。

「ジャン君は将来ノール候を継ぐ、場合によってはフィニー王家に戻るのですからあまりこの国に深入りしない方が良いと思うのですが」

ジャンは自分たちの亡命を受け入れてくれたナ国の現国王であるスイ王に気に入られており、近い内にグリューゲルとは離れた飛び地になっている領地を下賜されそうだった。その話は母親であるソフィーにも伝えられており、現時点では若すぎると保留しているが、ジャンは意外と領地経営に前向きだった。

「父上がシュツドから後添えを迎えて弟が生まれた以上はフィリップがノールの跡継ぎです。ならば自分の生活費を稼ぐ方法は考えないとダメですからね。商人でも術士でもヴィジランツでも生きていきますけど、政治的に問題がありそうな親子を抱えてもらっている恩もありますので、返せるなら返したいと思うんですよ。母は反対するでしょうけど、割と居心地がいいからここに定住してもいいかなと思っっていますし、将来的には北大陸の開拓団に行ってもいいですね」

ジャンほどの強大なアニマの使い手であれば、どの分野に進んでもある程度の成功は見込めるとシルマールも思っていた。だが、世界でも屈指の術士になれる才能を政治に携わること無駄に費やすのは勿体ないと思うのは自分が術士の立場で考えた答えであり、貴族である彼の役割は支配者であることも理解している。

正式に弟子入りしたジャンの希望は術を極めることではなく、ツール職人の家に生まれた自分の持つツールの製作技術であり、教え始めてすでに4年になるが、将来的に既存のツール職人の仕事を無くしような新理論を用いたツールが実現すれば、戦争の有り様も変えてしまうことも想像できた。それが社会に出るならば管理あるいは最低限意見できる立場にならなくてはならない。ならば彼は自分の発言力を高めるためにも領地経営を成功させるしかない。

「ですがジャン君、君はあんなものを作って世界を征服したいのですか？」

「術不能者が戦場に駆り出されれば盾程度の役割しか与えられませんが。しかし、私が今考えているツールならアニマの強弱は術士以外にはほとんど意味を持たなくなる」

弟子の発言の意図を理解したとき、シルマールは空恐ろしくなつた。

「多分、兵器として使われるのは一度か二度程度であり、後は抑止力として機能させますよ。あれを制作できるのは私が今後経営する領地か商会の工場、保有するのは私とナ国の王家だけ。ナを中心とした緩やかな国家体制から経済、軍事的な一大強国とその影響下にある周辺国という枠組へ組み替える必要があります。ツールのことは陛下には話していませんが、陛下も私の案には前向きです」

「そこまで話しているのですか、ですがこの事をソフィー様は？」
「母上に要らぬ心労を増やす必要はないでしょう」

将来的にナ国の力が減退することをジャンは知っていたし、スイ王もその傾向があることを理解していた。同じ王でもフィニー王はハン帝国の公爵位が相当であり、現在のフィニー王家であるユジーヌ家はハン帝国の直系の子孫ではない。それに対してナ国はハン帝国の王族が築いた王国であり、叙爵の権利がある世界最高の権威を誇る。だが南大陸の外に目を向ければ、ナ国に並ぶ歴史を誇るラウツホルプ公国やシュツド侯国から姫を迎えたことでメルシユマン統一が目前になったフィニー王国。また大陸内でも伸長著しいワイド侯国などがあり、このままでは権威だけの国に成り果ててしまう。ジャン・ユジーヌはそれを理解した上で、スイ王に自分の考えを告げた。

「国力の増大は一朝一夕では敵いませんが、第一に飛び地になっている王家の直轄地の整理をしなければなりません。そして派遣されている代官が悪政を敷いているのならば正さなければならぬでしょう。私のような若年のものが派遣されれば代官も油断するはずですが、かなりの税を懐に入れて、娘などを味見するようなあくどい人物、これは殺してしましましょう。本人は白を切るつもりでしょうが、自白させます。これをもって一罰百戒とし、後の代官に関しては領民にたいして5年ほどの税の減免、これは代官の持ち分から搾り取ればいいはずですよ」

おそらくこれほど政治を語れる少年というのは歴史的に鑑みても稀だろう。今年で20になる息子のシヨウでは対抗することもでき

ないと痛感したと共に、ギユスターヴ12世という男は息子にどのような教育を施したのか興味を覚えた。だが今重要なのは、緩やかに衰退の時を迎えるか、隆盛を取り戻すべく動くかの選択を迫られたことだ。

(この子どもは劇薬だ。自分なら統御できるかもしれないが、シヨウとは相性が悪い)

スイ王は正道を歩むように嫡男であるシヨウを育ててきた。ナ国の王に求められる資質は調停者であり、謀略ではない。10年後はまだ生きているつもりだが、国政に関しては王太子であるシヨウに大半を委ねるだろう。ナでも少くない血が流れる、それは仕方ない。だが既得権益を脅かされた者がシヨウを唆してジャンと敵対するようなら、負けるのではないかという不安が脳裏をかすめる。

「ジャン・ユジーヌよ。お主は何故余にこのようなことを告げた？」

「兄はいずれ国を取り戻すでしょうが、私と分けるには小さすぎます。ならば自分の足場は自分で作らなければなりません。できれば北方開発で切り取りたいんですけど」

「つまり余とお主との間で盟を結びたいと言うことか」

「子どもの世迷い言と一笑に付さない辺りが統治者としての条件だとするならば私には無理ですね。陛下が生きている限り私と陛下は共犯者であり、身罷った後も理不尽な事態に陥らない限りは私はナ国の為に尽くしましょう」

ナ国の王スイは幼いジャン・ユジーヌの才を認めて、13歳の彼にケツセルの地を与える。前任者である悪代官の不正を暴いたことと、領地経営の巧みさを評価したスイ王は、ジャン・ユジーヌを信任して王領の飛び地の監視ならびに、領邦国家への調査権を持つ監察官に任官した。ジャン・ユジーヌは監察官の仕事をレーテ侯爵に就任するまで続け、ナ国の中興の祖であるスイ王の忠臣として後世の歴史家からは高い評価を、同時代の庶民からは敬意を、同時代の権力者にとっては恐怖を持って次のように呼ばれることとなる。

閑話Ⅰ アニマにまつわる師と弟子の会話

「アニマの感応作用についての「考察」というレポートが弟子から手渡されたのは、彼が11歳になった時だった。

内容の趣旨としてはアニマを感じることに慣れすぎた現在の人々はアニマのふれ合いをもって好悪を決める傾向にあり、術力がある一定ライン以上あるいは以下ではない限り特にその傾向が強くなる。ここで言う一定ライン以上とは術士、一定ライン以下というのは術不能者のこと。

大人顔負けの文章を書けるこの子の才能には驚かされるばかりだが、内容を読み進んでいく内に主旨の危険性を理解した私は読み終わるとため息をついた。

「これは公開できませんね」

強い怒りによってアニマが暴走すると言われるように、アニマと感情が結びついていることに関しては古来より言われてきた。原始社会に於いてはアニマを薬などを使って暴走させることで自然と一体化を図ろうとした宗教もあったそうだ。英雄のカリスマなどもこの理論で行けば証明できるだろう。ここまではいい。問題は他者の感情を意図的にコントロールする、あるいは記憶を読む術の方だ。

「好悪を弄る程度ならば一瞬で、特定の命令を聞かせるなら多少時間にかかるが実現可能。ただしあまり複雑な命令は無理」

これが本当であるならば、戦場で敵の将軍を殺すなど大抵の犯罪が可能になってしまう。

「ジャン君はこれを犯罪に使ったことは」

彼を信頼しているが、師として訊ねなければならぬことはあるのだ、

「危害を加える目的で使ったことはありません。術不能者に効かないことはギユスターヴとプリンで確認しました。一般の方々に関しては商売でちよつとオマケして貰った程度です。プラス方面に使ったことはありますが、マイナス方面に使ったことはないので理論上はできるという感じです。モンスターに対する魔除けの周波数も研究中

ですが何分外に出る機会がありませんので」

「魔除けに関しては、ツール化できれば公開してもいいですね。しかし、魅了チャームと催眠ヒュプノ、読心リードに関しては私とあなただけの秘密とします」

「二門の秘伝として残さないのでですか？」

「二門の跡取りに君を据えることはできません。そしてこの技術は悪用される可能性が高い以上、当事者である君と師である私が墓まで持つていくべきです。一門の秘伝には精神攻撃に対する防御方法を残します」

自分の後継者がこの術を使つて暴走などしたら、師であるルナストル先生に言い訳が立たないし、そもそもここまで精緻なアニメコントロールができる人間が今後現れる可能性も少ないが万が一のことはある。ならば別の理由を付けて対策だけを伝えればいい。

「私たちはアニメを盲信しすぎですね」

アニメを前提とした行動原理と社会構造。

「だから、俺はギユスターヴを畏れ、敬うのです。アレはアニメを見ないで人を見る。以前お会いしたナルセスさんのアニメを用いた人相見は見事ですけど、惑わされない術不能者の信を得るのは本当に難しい。彼らは俺達とは違う見方で世界を見ている」

彼に関わった全ての者が一度は思うだろう。彼がもし『ギユスターヴ』だったならと。その夢が実現したならば恐らく1230年代にメルシュマンは統一されていたであろう。だが現実にはギユスターヴは術が使えない兄が名乗っており、弟は自分の弟子として術を学んでいる。だが自分にとってはそれで良かったかもしれないと思う。もし彼が王になっていたのならば、ここまで濃密な関係では無かつただろう。彼にとつて政治の師は父であり、この国の王であるスイ王であるが、いずれ越えていくとしても、今の彼に術の理を教えることができる特権を享受できるのは自分だけだ。

『私は君という弟子を得ました。子どもの君を見つけた時は正直嫉妬しましたが、同時に育てたいという欲望が生まれました。自分の得た技術を全てたたき込める存在がいるというのは幸せです。君にもそういう存在が現れるといいですね』

ルナストル先生の晩年、ふと自分に初めて出会った頃の思いを吐露したことを思い出した。それはまだ私がテルムに行く前の話だ。ジャン・ユジーヌという人物の成長を見続けている今、ようやく師の言葉の意味を理解したが、先生が全てを仕込む弟子は私で良かったが、私は最低でももう一人、術士としての一門の技術を教える存在を見出す必要があるだろう。

天才を枠の中に組み込むことはできる。だが、規格外を枠の中に組み込むことはできない。

「ジャン君の見える世界はあるいは古代文明の人々に近いのかもしれませんがね。君ならいずれクヴェルを作ることできるかもしれない」

この子とはかく目がいい。アニマの強弱や流れを感じることは術士の必須条件だが、それは一般人がアニマを感じるという行為の延長線上である。しかし弟子であるジャン君はそのレベルを超えている。以前、どうして見えると思うか聞いたことがあるが、逆に何故感じられることに違和感を覚えないかと問い返された。常識だからと言ってしまうのは簡単だが、自分とて学究の徒である。答えはまだ保留しているが、私と彼が生きている内に出したい宿題の一つだ。

「俺がもう少し成長して、ツールやクヴェルについて詳しくなった時、先生に相談したいことがあります」

「そうですか、君から出される宿題はいつも困難ですからほどほどにお願いしますよ」

後世に於いてシルマールの名は、ジャン・ユジーヌの師であると共に、近代ツール技術史における尤も重要な理論の発案者としても残ることになる。

アニマの干渉作用による増幅回路―通称シルマール回路の考案者である彼は、弟子であるジャン・ユジーヌの発明するツールの基礎になったことから、後世では技術者として位置づける場合もあるが、政治家・術士・発明家・商人・教育者など様々な顔を持つ弟子に対し、生涯術士という肩書きを使い続けた。術一辺倒の時代から鉄やツール

の時代になると、利便さを享受しながらも過去を懐かしむ人たちに
よって、「最後の術士」ヴァン・アールと共に、「最高の術士」と称
され重要な歴史のキーパーソンとして史書や物語に登場することと
なる。

1230年代前半の彼は、破天荒な弟子から出される宿題を解くと
いう楽しみもあつて割と充実していた。だが、30年代半ばに起こる
様々な出来事は自分や教え子達の環境を大きく変えるものだった。

1233年 少年統治者

約80名の人が住まうケッセルという地が13歳になったばかりのジャン・ユジーヌに下賜される際、彼が最初に求めたのは自分を補佐してくれる人物の紹介ではなく、過去5年間のケッセルの税収と、その周辺の領地の大まかな税収、そして天候状況だった。

5年前というとジャンはすでにグリユーゲルにいたので、不作だったか豊作だったかなどの大まかな情報は持っていたができるだけ正確なデータが欲しかったのだ。

「税制報告書は探せばあるが、グリユーゲルなどの大都市ならともかく、ケッセルの周辺地域の天候状況はわからないと思うが」「できるだけ事前に調査しておくと手間が省けますから」

そう、彼の役割は領主としての役割もあるが、求められていたのは綱紀の粛正だった。そこで目を付けたのは、村の戸籍調査と税の納入額、そしてグリユーゲルにある報告書の比較だった。

任命されてから一ヶ月で必要な資料を全て揃えた彼はケッセルに赴くが余り歓迎されたものでは無かった。13歳の少年が供も付けずに領主としてやって来ても、信用されるわけがないのはジャンも理解していたし、麦と野菜、葡萄、そしてささやかな畜産という農村を農業という分野で急激に発展させる術を知らない以上、余計な口出しでもしようがないと思っていた。自分の知恵が役立つとするなら秋の収穫まで待つ必要があるだろう。ならば、秋になるまでに本業の方を片づけるべきだ。そのような結論に達したジャンの動きは速く、戸籍の調査と取られた税金について確認した。

村を治める村長とは別に、王家の直轄地には代官と呼ばれる領地の監督と税収を集める役割を担う者が派遣される。普段彼らは王都に住んでいて、定期的に担当の村々を訪れるのだが、彼らは基本的に領地の持たない次男や三男の貴族であり、国からの給金で生計を立てていた。

極端な話、彼らの仕事は村から集めた税金をそのまま、王政府に渡

すだけなのだが、不正というのは行われる。1割く2割程度のごまかしなら誰でもやっているから割増しの税金は無茶苦茶だ。

「……いくら本業でなくてもこれだけあからさまだと気付くよな」

前世では会計士を使ってはいたが、それでも数字の間違いや不正が行われぬように目を通していた経験から、誤魔化す際の方法というのはパターンがある。シンプルなものとしては、収益を低く報告するか、納税者の数を操作するか。ジャンの前任者である男は、この両方を併用して王都に報告していた。

「宮廷の税務にまつわる書類まで改ざんされているのなら問題でしたが、その辺はザルだったようで助かりました。もともと周辺の領地の収支報告書なんて代官の権限では見ることができないので当然ですけど」

もちろん、周辺の領地に関してはジャンでは無く他の人物が派遣されたのだが、各地の領主達も全体の収益ならともかく王領に隣接する村落の収支だけなので包み隠さず報告した。

かくして現地の報告から周辺の領地に比べて異常に高い税金を納めたはずなのに、グリューゲルに納められた金額は減少しているという不可思議な状況が明らかになったので、ジャンは諸々を揃えてスイ王に提出した。

「その有能さをもっと別なところに使っていれば処断せずに済んだものを」

ため息を吐くスイ王だが、そもそも不正などしようと思えばいくらでもできる仕組みに問題があると両者は理解していた。非難するとは簡単だが、それが何十年もまかり通ってきたのだからとすぐに改善できるとは思っていない。まずは領民が自発的に働きたいと思える環境の整備が自分に与えられた役割だろうとジャンは思っている。とにかく今は自分がやるにせよ、将来的には人材育成の必要があるだろう。

「財産の没収に加えて、売られた娘を買い戻さなければなりません。不正が原因とはいえ、一度売買契約が成り立った以上、代金のやり取りもなく陛下が指示されれば不要な軋轢が起こるでしょう」

代官や税務官の税金の意図的なごまかしに関して死罪は免れないし、財産は没収、家族も追放というのが当時の決まりだった。今回の場合さらに問題があり、税金の不足分代わりに子どもが昨年と一昨年一人ずつ売られている。これは不正を見逃していた統治側の責任である。スイ王の代理人であるジャンとしてもできる限りの事をしなければならぬ。

私腹を肥やすのも人身売買も犯罪であることに変わりはないが前者はともかく後者は人倫の道に背く。かくして、ジャンはそれをやらした前任者に対して容赦しなかった。

「残念ながら、あなたの処刑は確定しています。財産は没収しますし、あなたが売った子ども達を買い戻せないあるいは、死んでいた場合は、あなたの「ご家族に同じ境遇をしてもらうことになるでしょう。田舎の娘より没落した貴族の娘の方が教養がある分高く売れるでしょうから」

呼ばれたケツセルの前代官であるドミニクは登城したところを捕らえられ、取調室に連行された。そこで待っていたのは確かジャン・ユジューヌという彼の後任だった。

「お、俺だけじゃない。代官なんて甘い汁を吸っていて当然じゃないか。何で貴族である俺がこんな恥辱を受けなければならぬんだ！」
彼は最初こそ白を切ったが、読み上げられる不正の正確さ13歳とは思えない覚めた瞳に段々余裕がに蒼白になっていくドミニクはジャンに対してわめき散らしたが、ジャンは怯えることなく次のように切り返した。

「私が賜った領地を以前監督していたのがあなたで、人身売買のバツクマーゾンまでもらっていたとなるとこちらも容赦する必要性を感じ無かったといったところでしょうか。それとあなたは既に本家から縁を切られていますので、貴族の身分なのか怪しい状態ですね」

ドミニクは既に自分が助かる可能性が全くないどころか、妻や娘達の未来も絶望的だということを理解した。だから、彼の提案は暗闇につつまれた己を照らす。光に思えたのだ。

「もつとも、あなたの不正はあなた個人の罪であり、財産はともかく、

ご家族を売るのは私としても心苦しい。どうでしょう、あなたが知っている同僚の秘密を教えて頂ければ、ご家族の安全は私と陛下の名において保障いたしましょう」

相手を絶望状態にし、救いの手を差し伸べる。更に感情を多少操作することで親近感を抱かせることに成功したジャンは、欲しかった情報―他の代官達の運命を握るカードを手に入れたのだ。

「拷問吏でもここまで鮮やかに自白はさせない。あの飲み物に何か効果があるのか」

「別に自白させる効果はありません。子どもである私のバック―陛下です。私が赴任して2ヶ月でこれだけの資料を集めるのは不可能だ。ならば陛下に誰かが密告をしたのではないかと疑心暗鬼に陥った。どうせ自分が死ぬなら道連れにしても家族の安全を買いたいという心理は人間らしいと思いませんか」

一緒に調書作りをしていた書記官と騎士は、目の前の少年が術不能者として蔑まれるギユスターヴの弟であると共に、フィニー王ギユスターヴ12世の子であることを思い出した。ジャンはテルムとグリューゲルで政治を学ぶと共に、市井に混じりながら人の動かし方を学んでいた。それが今少しずつ花開こうとしている。

今は少年領主として笑っていられるかもしれないが、少年も5年、10年経てば青年になる。その時、ナ国にとって良いことなのか悪いことなのか。今の彼らには想像することはできなかった。

ドミニクの不正について、本人は処刑、財産は没収、家族は追放という処分が下された時、他の代官は震え上がった。これらの犯罪に手を染めていない者は一握りしかいなかったからである。

同時に『計算違いで報告した場合も考えられるので、その場合は速やかに報告し、差額に一割を加えた金額を納めれば良い』という布告は彼らを救うこととなる。期間は過去10年間、もつと遡ることもできたのだが、これ以上の追求は、宮中の官吏を過労死させる可能性もあったので却下された。綱紀の肅正としてはこれで十分だからだ。

一年前に12歳のミレイユを連れて行った男の後任者―新しい領

主といわれた少年に貴族らしい傲慢さは無く、理不尽に対する怒りの表情が見て取れた。そしてできる限りの手段を尽くして取り戻すと約束した。

それから3ヶ月後、少年はミレイユと一昨年売られたジーゴのところのアンナを連れて戻って来た。そして村の主立った者を集めてこういったのだ。

「今後5年間の税を引き下げます。これはスイ王陛下の勅命なので少なくとも陛下が取り消さない限りは有効です。また、取りすぎた税は一部でありますが返還します」

「ほ、本当でございますか」

「もちろん、天候によつては皆さんに苦勞をかけることもあります、家族を売らない、餓えで人を出さない努力はしていきます」

この言葉を聞いてある者は涙し、ある者は平伏した。この方は今までのような代官とは違うと思った。子どもの理想論でいずれ汚いことをいうだろうと警戒している者も一部はいたが、とりあえず民の心を掴むという意味では成功したと言つていいだろう。

娼館に売られたミレイユはまだ客を取らずに先輩達の世話をしていたが、来年には客を取るんだろうなと幼いながらに思っていた。涙する父と母の姿は忘れることができない。

「ミレイユ、お前にお客さんだ。ああ違う違う、お前を買い戻しに来たという方だ」

綺麗な金髪でいい服を着ている。一応人を見る目も教育された今ならわかるが、かなり身分の高い貴族様だと思った。

「こんにちわミレイユ。目立つ傷とかも無いようだし、ケツセルのご両親に無事に戻せるね。いい所に売られたおかげで初売りの次期が遅れたというのは皮肉だけど」

「お坊ちやまに言うのも何ですが、うちが売るのは肉体的な快樂だけじゃないですからね。もう少し大きくなったらぜひお立寄りください」

「考えておくよ。待っているから準備ができたら来なさい」

ミレイユは自分が村に帰れることをようやく理解し、喜色満面の笑みを浮かべて自分の部屋へ駆け込んでいった。それを見た娼館のオーナーはため息を付く。

「もう少し磨けば光ると思ってたのに恨みますぜ」

「払った金額の3倍で買い戻したんだから納得して欲しい」

「しかし、代官騒動で売られた子を買戻されたのはケツセルのアンナとミレイユだけ。彼女達は本当に運がいい」

ドミニクと似たようなことをした代官は他にもいたが、買い戻すか否かは他の村落の長に委ねられた。ジャンの行動はお人好しにも見えるが、情報集めと尋問しただけで費用はそれほど掛かっていない。対して村々は今後のことを考えると蓄えておけるのなら蓄えておきたいと思うだろう。ジャンはその選択を責めることはできないし、人間の価値が安いのは仕方ないと思った。

「人は住みやすい場所に移住するからね。これも一つの投資だよ」

オーナーは多分目の前の少年領主は善意もあっただろうが、それ以上に計算した部分が大きかったのだろうと行動を理解した。農民は作物を作り、商人は金を作る。では貴族は何を作るかというと、名声を作ることができる。そして名声や評判は時として金以上の力を持つ事をオーナーは知っていた。そして、その価値をまだ13の子どもが知っていることが末恐ろしかった。

「坊ちやまは貴族にしておくのは惜しいですな。商人になったなら大成できたでしょうに」

「まあ領主だから収益を上げるとなると目玉となる商品が必要だが……時に主人、化粧水や香水はどこから仕入れてるんだ」

「シユッドのレオニダス商会でさあ。どうしてもあっちの方が品質がいいんでね」

「つまり、そっちでも需要はあるということか」

「当たれば大きいですがね。何せそういうのは初期投資が必要で外れると悲惨」

「知っているよ。とりあえずは別の本業を考えるさ」

「まあ、私もこれで結構目が利くつもりですので、何かいい商品ができ

「たら見てあげますよ」

やがて、少ないながらも私物を纏めたミレイユを連れて少年領主は去っていった。それから一年後の秋に、送られてきた2本のワイン、『ケツセルの悪戯』というラベルが付いた1233年産のワインは、かのラウツホルプの雫にも匹敵するような甘口のワインで、送られた内の一本は空けずに取っておくことにした。あの少年領主がもう少し大きくなってここを訪れた空けてやろうと考えたのだ。余談であるが商品としては100本のみ出荷された1233年ものは、ケツセルがワインの一大生産地になったきっかけでもあり、またユジーヌ商会の最初の製品ということもあって非常にプレミアが付くことになる。

1233年秋

今年のケツセルの住人の表情は明るい。

新しい領主がどういう手を使ったかは分からないが、余計に取っていた税金がわずかながら戻って来たし、今年の税金の減免をすることを約束した。何より売らざるをえなかった娘達が戻って来たことが嬉しかった。

「しかし、こんなこととして本当にうまいワインができるんですかねえ」「ラウツホルプは寒いから天然でできるらしいけど、ここで糖度を上げるとなるとこの手段が妥当かなって。まあ一年目だし半分は従来通りの仕込み方でいいだろう」

ジャンがケツセルの住人に提案した新しい事業としてワイン作りがあった。それも大量に作るというよりは高級路線を狙ったものだ。「ブドウの中の水分と果汁の中に含まれるエキスが凍る温度は微妙に異なる。この水分を取り除くことができればより糖度の高いワインが作れる」

いわゆるクリオ・エクストラクションという技法だが、既に他の果実をジュースにして実験しているので失敗はしないだろうとジャンと師であるシルマールは確信していた。後は味がどうなるかの問題である。今年度は間に合わないが、場合によっては実家であるメルシユマンのブドウの苗を調達してもいいだろう。

「ジャン様、ご苦勞様です」

屋敷付きのミレイユが汗だくになったジャンにたおる手ぬぐいを差し出す。

「ありがとうミレイユ。それとせっかくの収穫祭なんだ。君も友達と遊んでくるといい」

「いえ、ミレイユはジャン様の侍女ですので」

ミレイユは曲がりなりにも色々な作法を学んでいたので、ケツセルのジャンの屋敷を管理する侍女の一人として雇われていた。ジャンに救われたという意識が強いミレイユは、誠心誠意ジャンに仕えているが、彼女の考えているご領主様のイメージと、実際の自分のイメージとの乖離が著しいのではと最近ジャンは思うようになっていた。さらに言えば都会に行つて洗練されたミレイユは、同年代の異性から非常に人気があり、独占しているとかあらぬ噂を立てられるとジャンとしても困るのである。

ともあれ、それは今後の課題として領地の経営に目を向ければ、麦などの収穫も上々であり、流行病が原因でない限りは無事に冬を越せそうなのが住人にとって幸いだった。

ジャンにとつては自分の不在時に政を任せられる人材、万が一の時の領軍―といっても実質自警団のレベル―を率いることができる人材。今はヤーデ伯の屋敷を間借りしているが、独立する以上は屋敷の手配と、そちらを管理できる人材。とにかくこれから必要な人材を、どのようなねん出するかを考えさせられる一年となった。